

# 外国語科

## 1 本校外国語科が担う生徒の「学力」と「基礎・基本」

### (1) 外国語科の取組

本校外国語科では、学習指導要領に掲げられている外国語科の目標（ 1 ）及び学校教育目標を受け、教科の目標を

『基礎・基本の定着を図り、コミュニケーション活動を通して自分を表現し、相互理解を深め学習を進めます』

と設定している。

授業においては、知識の蓄積に偏ることなく、実際のコミュニケーション場面をできるだけ増やし、その楽しさや重要性を生徒自身が体感できるよう、指導法・評価法の工夫や改善など教師の授業力の向上に努めている。第2，3学年においては習熟度別による授業が展開されており、4技能の基礎的な内容を重視し、時間をかけて取り組むB（Basic）コースと、基礎的な内容をもとに発展的な自己表現活動にも取り組むC（Challenge）コースとに分けている。

1・・・学習指導要領（外国語科の目標）

『外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う』

### (2) 外国語科が担う生徒の「学力」と「学力向上」

上記の外国語科の目標および本校学校目標「自立と自律」をかんがみ、本校英語科の担う主な「学力」を考えた時次のようなものが挙げられる。

積極的にコミュニケーションをとろうとする姿勢（学ぶ意欲）

英語を使って臆せず自分を表現する力（表現力）

英語を通して相手の思いを理解し、豊かな人間関係を築く力（思考力）（判断力）

異なる言語や文化に対する知識・理解力（知識・技能）

生徒にこれらの「力」がつくことで、自分を表現したり他と豊かに関わろうとする姿が学習場面だけでなく、日常の生活場面においても現れることを「学力向上」ととらえる。

### (3) 外国語科の「基礎・基本」

外国語科の目標にある「実践的コミュニケーション能力」とは実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用できる能力をさしている。横浜市の教育においては

これらを支える基礎・基本として次のように3つに分けてとらえている。音声、語彙、文法等言語材料や文化について理解し、知識を身につけること（知識・技能の基礎・基本）実際にそれを使ってコミュニケーション活動を行うこと（学びの基礎・基本）そして自分の意見をもち、積極的に英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする姿勢（生き方の基礎・基本）である。（「横浜市中学校教育課程編成の指針 外国語」参照）本校がもっとも大切に考えているのは3つ目にあげた姿勢の部分であるが、当然それだけではコミュニケーション能力の基礎が身に付いたとは言えない。これら3つをバランスよく学ぶことが大切である。

## 2 取組（実践研究）の経過

本校外国語科では、「個に応じた指導」の一つの手だてとして習熟度別コース学習を平成13年度から取り入れており、今年が3年目の取り組みとなる。

### 平成13年度・・・3年生のみ習熟度別コース学習を実施

様々な文献や資料を参考にしながら、本校にあった習熟度別学習の在り方を探っていった。生徒が自己選択で2つのコースから自分に合っている方のクラスで学習を進めていき、原則として同年同じ教師がそのコースを受け持つ形をとった。それぞれの生徒に応じた支援が以前よりしやすくなった。しかし、受け持ち以外の生徒の様子を把握しにくいことや評価の点で課題が残った。

### 平成14年度・・・2、3年生で習熟度別コース学習を実施 1年生で少人数学習の実施（学期に1単元ずつ）

2年生でも習熟度別学習を実施し、より早い段階から個々の生徒を支援しやすくなり、多くの生徒にも情意面で前向きな変化が見られるようになった。どちらのクラスも言語運用の時間が増えたことで自信へとつながったと考えられる。依然として評価の点、また学習空間の工夫ということが課題としてあがった。

1年生では、先の総則でも述べたとおり、平成14年度は横浜市教育センター研究員に依頼し、1年生でも習熟度別学習へ向けての橋渡しが出来るよう少人数授業の取組を行った。少人数の利点を生かして、まだ話すことに抵抗感が少ないうちにたくさんコミュニケーション活動を通して話すことに慣れることができた。

### 平成15年度・・・2、3年生で習熟度別コース学習を実施

今年度は、学習空間の工夫（掲示物・座席の配置等）にも取り組み始めた。学年や生徒の実態に応じて柔軟にコース変更の機会を設定したり、担当教師が途中で入れ替わったりすることでより多くの生徒の学力を把握しやすくなった。また、教師同士の情報交換を密に行うことで評価の点についても少しずつ工夫ができるようになってきた。

### 3 習熟度別指導・評価にあたっての考えかた・方針

#### (1) 指導に関して

生徒のコミュニケーション能力をのばすために、授業内のコミュニケーション活動の重要性は先に述べたが、それを実践するために欠かせないのが、英語表現の十分な練習や運用の習慣形成である。少人数集団で授業を行うことにより、一斉授業では十分に確保することが難しかったこの時間を保証できることは大きい。Bコースでは言語材料を確実に定着させるためのパターンプラクティスや教科書の音読を十分に時間をかけて行うことで、コミュニケーションを図るときの自信につながるようにしている。またCコースでは、身に付けた内容を使ってより豊かに自分のことを表現できるような活動を多く取り入れ、「話す」だけでなく「書く」の視点からも自己表現力を高める工夫をしている。生徒の学習の速度に応じることができるだけでなく、特にCコースでは既習事項を最大限活用して、内容が深まるように心がけている。このように、習熟度別学習においては「個人差に応じる」ということが重要であるが、生徒の実態を把握し必要な支援をするだけでなく、それぞれの生徒が興味を示していることを授業の中に取り入れるなど「個性を生かす」ということも、併せて心がけるようにしている。

#### (2) 評価に関して

習熟度別コース学習における評価は、コースは異なっても同じ規準で行うための活動をどのように評価するかなど、綿密な計画が必要となる。また、結果のみを評価するのではなく、学びの過程や生徒の変容をその都度評価していくことが望ましい。評価は、授業内の「観察法」「面接法」ワークシートの「点検」、単元や学期ごとのテストに代表されるような「質問紙法」など様々な角度から生徒の成長を見ていきたい。また、教師の授業改善に役立てることも忘れてはならない。

評価の際は次のようなことに配慮している。

- ・主な評価項目やその規準を学期のはじめに具体的に提示し、生徒が見通しをもって学習活動に取り組めるようにする。
- ・他コースを指導している教員との情報交換を密にし、評価資料を常に共有化する。
- ・生徒が自己目標を明らかにした上で、自己評価を行い、自分なりの課題をもって学習に取り組むことができるようにする。
- ・教師はできるだけ文章による評価も行い、生徒が良かった点や課題にするべき点を生徒がきちんと理解することができるようにする。

### 4 指導・評価にあたっての具体的工夫

#### (1) 教師同士の共通理解

コースによって、学習の内容や教師の支援の仕方は異なるとしても、評価資料や評

価規準は同じであるし、進捗を確認し合うために、教師同士の綿密な打ち合わせが必要になる。打ち合わせには、大きく分けて次の2種類ある。

#### 定期的な打ち合わせ

時間割に組み込まれていないが、決まった時間を設定している。

(打ち合わせの内容)

- ・学期の予定や単元の予定についての確認や修正
- ・評価規準の設定と確認
- ・授業における生徒の様子への報告

(成果の上がった活動や逆に改善を必要とすることについて)

#### 授業直後の打ち合わせ(報告)

毎時間ではないが、日を変えないうちに授業の報告を短時間で行う。

(5分程度) 時間的に厳しい場合にはメモを交換して報告し合う。

(打ち合わせの内容)

- ・作成したハンドアウトの交換
- ・その日のクラスごとの進捗
- ・意欲的な生徒の様子や作品(作文やスキット)についてなど

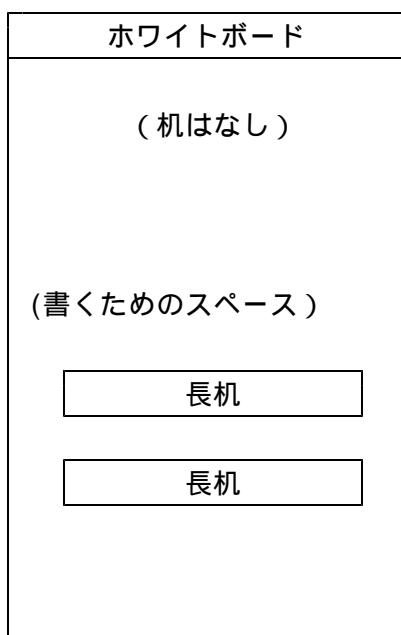
## (2) 学習環境の工夫(2年生の例)

言語の学習において、環境(ふんいき)はとても大きな要素である。したがって学習環境作りはできる限り工夫していきたいと考えている。年度当初、2つに分かれたコースの授業はそれぞれ普通教室と視聴覚室で行っていた。視聴覚室は学習内容に応じて空間を利用できるという利点があった。また習ったばかりの単語や生徒の作品などが掲示できるよさがある。それに対して普通教室では、日本語の掲示物も多く、教科の活動に直接活用できるものはあまり多くない。そこで移動できる黒板を利用し、習ったばかりの単語や、その単元に関わりのある地図や情報などを掲示していた。(次ページ図参照) 席は学級単位の時の席ではなく、一体感をできるだけ感じるように前に詰めて座るよう声かけしていた。2学期に入ってから、空いている多目的ホールの半分に椅子と机を並べ Study Room とし、そこで授業を行うことにした。ここでは、視聴覚室とほぼ同じ感覚で掲示物や椅子の配置が自由にできるよさがある。2学期は主にコの字型に座席を配置して授業を行ったが、生徒は以前よりも一体感を感じることができるように集中して取り組む場面が多く見られるようになった。

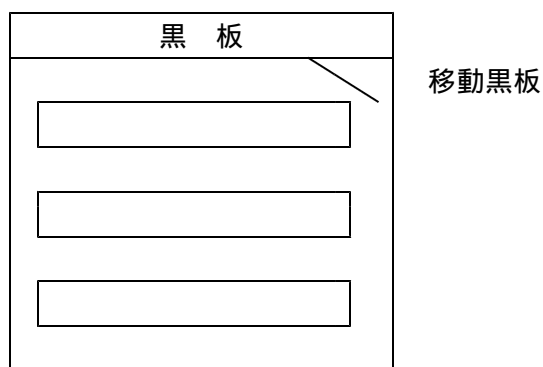
また、Bコースでは多くの視覚教材を用いて授業を進めている。Cコースと比べると日本語での指示を要求する生徒が多いためである。視覚や聴覚に訴える教材を工夫して多く使うことにより、コミュニケーション活動の助けとなると考えられるからである。絵などはインターネットも活用するののも一つの方法であると考えている。

【1学期の座席配置】

< 視聴覚室 >



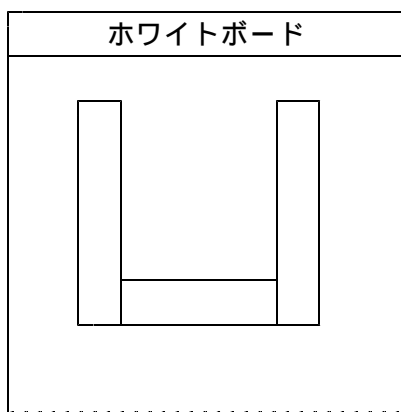
< 普通教室 >



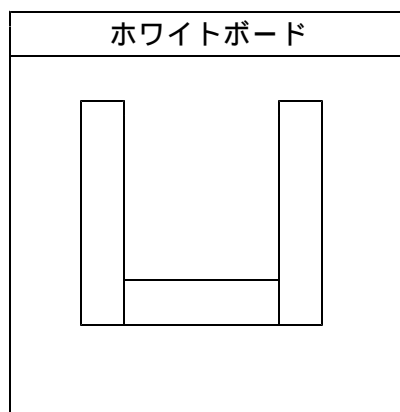
注) 普通教室の場合学級により多少異なる

【2学期以降の座席配置】

< 視聴覚室 >



< 多目的ホール >



(3) 学習内容の工夫

コースは異なっても学習目標は同じであるということは先に述べた通りだが、生徒の実態（思いや願いも含む）に応じて学習内容や活動方法、時間配分等の工夫を図ることが生徒の意欲を持続させる意味でも学習内容を確実に定着させる意味でも大切である。

具体的には、Bコースの生徒たちの多くは『コミュニケーションを図るための基礎力（語彙や文の構造）を身につけたい』と感じているという実態がある。したがって、1年生で習った内容の復習を取り入れながら確実にそれぞれの単元で学ぶ key sentence を習得できるように時間をかけている。教師は個々のつまづきをできるだけ早く発見

し、それに応えていく姿勢が求められる。

Cコースの生徒には『コミュニケーションするために必要な表現力をさらに向上させたい』と希望している生徒が多いため、「生徒の表現したいこと」に注目し、単元で習った内容にとどまることなく話す・書くといった表現活動へ広がりを持たせることができるように工夫している。たとえば、友達同士での会話の場面や時間を多く設定したり、short essay を定期的を書く機会を設定したりしている。

#### (4) 学習形態の工夫

基本的には習熟度別コース学習で進めているが、この学習形態はあくまでも「個に応じる」手段の一つであるにとらえている。したがって学習内容やそのねらいを見極め、学習形態を柔軟に編成することが大切である。

例えば、スピーチの準備や発表をする時間は出席番号で少人数に分けた方が適していると言える。Bコースの生徒は教師の支援を必要とする場合が多いため、教師は習熟度別学習でも全員の質問に答えられないこともしばしばである。しかし、編成の方法を変えると、普段英語を得意としているCコースの生徒は自分で作業を進められる場合が多いため、教師は1人に時間をかけて支援することが可能になる。また、生徒が上手に苦手な生徒の支援をする学び合いの場面も見られる。

さらに発表の段階では、生徒たちが技能的にすばらしいものから発想がすばらしいものなど、様々なスピーチを聞くことができ、ここでも学び合うことができるのである。こうした機会は、さらなる学習の意欲へと結びつくので非常に重要だと考えている。

#### (5) 評価の工夫

生徒にとっても評価は大変気になるものなので、単元の始めにはその単元で学ぶ内容や方法、そして主な評価の材料について話をしている。このことは、生徒自らが見通しをもって主体的な学びを進めて行くにも役立つと思われる。また、そこには必ず自己評価の欄を設けておき、自分がそれぞれの内容を終えたとき自分で学習の実現状況を把握する手助けになるようにしている。

また、定期テストの際は必ず振り返りを行うが、レーダーチャートなどを用いて自分の学習の実現状況の高かった部分、逆に今後の課題となる点をはっきりするよう工夫している。また、そのシートには「おすすめコース」を載せている。テストの結果だけがコースを選ぶ材料でないことを説明した上で、友だちや担当でコースを決めるのではなく自分の力をしっかり見極めるよう助言している。

よく単元のゴールとして設定される活動であるスピーチやスキットを行ったときには相互評価を行い、よかった作品についてあがった意見をその場で紹介するなど、生徒たちになるべく早くフィードバックし、励みとなるようにしている。

## 5 生徒の変容（生徒にあらわれる学力向上の例）

習熟度別コース学習をはじめから、生徒には様々な変容が見られた。Bコースのなかには恥ずかしさのため人前で英語を話すことにためらいを感じる生徒が多くいた。しかし、同じような力の生徒が集まっているという安心感から以前よりも教師に質問を多くするようになった。自分でも英語で表現してみたいと次第に感じるようになってきたことがうかがえた。教師側もその場で生徒に時間をかけて応じることができるようになり、そのよさを実感している。

また、Cコースでもそれまであまり発言しなかった生徒が活発に英語を話そうとする姿が見られた。本当は分かっているも周りの目を気にしてあまり手を挙げることができなかつたということが分かった。中学校時代は発達の過程で自分を表現していくことに躊躇する時期である。しかしこのように習熟度に分けることでお互いの表現力の差を気にせず、のびのび聞いたり話したりする様子がみられたことは、習熟度別コース学習における予想以上の成果であった。

技能面から見ると、Bコースの生徒は授業中の作品や定期テストから単語の読み方や書き方、過去形の作り方といった言語の知識が前よりも身に付いたケースが多く見られた。Cコースの生徒は既習の表現を使ってまとまった文章を書く力が少しずつついてきた。これは short essay や家庭学習用に配布している diary notebook から判断できる。

こうして学習を積み上げてきた生徒たちが昨年12月に行った自分の夢を語るスピーチではほとんどの生徒が原稿を頼らずに1分以上話すことができた。このことは習熟度別コース学習の大きな成果であり、私たち教師にとっても大きな喜びであった。

さらに2学期末に行ったアンケート結果（資料編参照）によると、学習意欲が高まっていることが分かる。例えばBコースの生徒の75%がこの形態で学習をするようになってから「わかると感じる場面が増えた」と答えている。また「英語を好きだ」と感じている生徒はCコースで86%、Bコースでも76%であった。「以前より何となくだけど少し英語がのびてきている気がする」「スピーチをやったあと、期末テストで不定詞の問題が出てすらすらと答えられたときに英語がしみついているのだと感じた。」などという生徒の声からも、習熟度別コース学習により個に応じることで、英語を実際に運用することができ、英語を身に付けている様子がうかがえる。

このような意欲の高まりは、言語の学習において非常に重要であり、さらなる動機付けにつながるので今後も、このように学習意欲が持続、あるいは向上していくように授業の工夫や改善を図っていきたい。

最後に、英語の学習を通して、生活場面において大きな変容が見られた例をあげる。英語で自己表現活動を続けてきていることで、「みんなが男女問わず仲良くなった気がする。」と教えてくれた生徒がいたこと。また、普段とても大人しい生徒が、スピーチをきっかけに「自分が歌を好きだと言うことをわかってもらえて嬉しい、合唱コンクールでもソロをやってみたい」などという希望をもつようになり、合唱コンクールでその才能を発揮したこと、などである。こうしたことは、まさに生活場面での「学力向上」であり、習熟度別コース学習が生んだ成果と言えよう。

## 6 今後の課題

今年度の実践からも習熟度別コース学習の良さは多く感じる事ができた。しかしこれまでの2年間はまだ手探りの状態でやってきたので課題も多く残されているのが現状である。

まずは、コース選択についてである。単に自己選択にならないよう、いかに教師が支援していくかということである。もちろん年度当初、コースについての説明やコースを決定する方法についてはアドバイスをしているが、実際は自分の英語の力ではなく、交友関係などで安易にコースを選択してしまう生徒が見受けられる。こうなると基礎力が身に付かなかったり、逆に飽きてしまって意欲が薄れたりしてしまうのである。したがって「能力別」と生徒や保護者がとらえることのないよう、丁寧に作品やコミュニケーション活動などを評価しながら、適切なコースを生徒自ら選択できるよう声かけをしていくことが必要である。また生徒自身がしっかり自分の力を評価できるよう、普通の授業の中でも自己評価力が育つような活動をさらに工夫していきたい。

次に学習内容についてである。これまではコースによる教師の支援の仕方を工夫してきたが、Cコースの生徒の中にはもっと発展的なことを、Bコースの生徒の中にはもっと基礎的なことをを望む生徒もいる。特にBコースではそれぞれの生徒が身に付けた言語に関する知識を様々な場面で繰り返し、持続することが今後の課題である。これまではコースによるアプローチの違いを工夫してきたが、さらにコースの中でも個に応じて柔軟に対応ができるように教材や教具を工夫していきたい。

最後は習熟度別コース学習の適する時期や学習内容について考えるということである。教科の目標や特性を考えると学習内容によっては少人数、一斉など様々な学習形態の工夫が考えられる。今年度行ったこのような様々な試みをさらに整理していき、より生徒が主体的に、効果的に学習を進めることができるよう工夫する必要がある。

少ない人数で英語の学習を行うことのよさは、「言語を運用する場面を増やすことができること」だということを常に頭に入れながら、これらの課題と向き合い、今後も英語の学習の在り方を探っていきたい。